
雪の日、僕等は歩いた

よしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の日、僕等は歩いた

【Nコード】

N9268B

【作者名】

よしき

【あらすじ】

雪の中、僕と君は歩く。でも悲しくて。切なくて。ただ、この瞬間が愛しかった。

僕等の街に雪が降る。

今年も、白い雪が。

音も無く、しんと降る雪の中、君は歩みだす。

並んで僕も歩き出す。

サクサクと靴の下で音が鳴る。

静かな夜。

雪が降る。

雪が降る。

白く降る雪に、いつもの街の喧騒は吸い込まれてしまう。

手を繋ぎ、ゆっくり、君と歩く。

白い息がはねる。

揺れるマフラー。

小さな結晶がとけて、君の髪をキラキラと飾ってゆく。

「綺麗だね。いっぱい降って、世界中綺麗になれば良いのにね。」

手を広げ、空から落ちてくる妖精を受け止めるように。

「こんな綺麗な雪になりたいな。今度生まれてくる時には…。」

街灯の下、僕は何も言えず立ち止まる。

抱きしめる事も、未来を紡ぐ事も出来ない僕。

切なくて、悲しくて、何も言えなくて…。

「遠い、遠い空の上で、天使が死ぬとその体は雪になるの。

そして地上を綺麗にしてくれる。

争いや、嫉妬、妬み、憎しみ…。

それらを浄化してくれる雪になって。

一時でも良いから、そんな事を忘れさせてくれる。

だから、雪になるってのもいいかなあ、なんて。」

繋いでいるフリをしていた手を離し、彼女の体を抱きしめるように
両の手で包み込む。

「ねえ、見て。」

見上げた夜空から街灯の光に包まれた雪が降り続ける。

それは、まるで空に昇ってゆくように…。

不安になり彼女を見る。

彼女はまだそこにいる。

「忘れないで、私の事。きっとあなたに最初に降る雪は、私だから。」

「たとえば、とけてしまっても水になり、海になり、雨になってあなたの傍にいる。」

「いつか、あなたが私に追いついてくれるまで、わたし…。」

「私、天使になれるかな…？」

手を繋ぎ、また歩き出す。

二人並んで、雪の中。

彼女から見えないように涙を拭いた。

悲しくて。

悲しくて。

どうか。

どうか、もう少しだけ。

彼女とこのまま…。

胸いっぱい。

願う。

想う。

僕等の街に雪が降り続ける。

恋人の幽霊と、手を繋ぎ。
歩いてゆく。
歩いてゆく。
そして。
雪は降る。
雪が降る。

（後書き）

内容からは信じられないでしょうが。

テーマ曲はユニコーンの「雪の降る街」です。

曲を聴きながら、降り続く雪の中を死んだ恋人の幽霊と歩くのって
切ないだろうなあ、と。

何故そんなことを考えたのかは自分でも不思議ですが、考えてしま
いました（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268b/>

雪の日、僕等は歩いた

2010年10月9日03時24分発行